

A) ジェイン・オースティン「高慢と偏見」

参照した原本：

Jane Austen “Pride and Prejudice” Penguin Classics
(with an Introduction and Notes by Vivien Jones)

本書は、当初「第一印象 “First Impressions “” という題で 1797 年に出版社に送られた原稿（出版を断られ原稿紛失）がその後改定され、1813 年になってやっと現タイトルで出版されたもの、とのこと。当時の英国の有産階級の娘による片田舎の家族を舞台にした恋愛小説ですが、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は、彼の名を冠する著作集で、オースティンについて

「彼女が掘った象牙の板は（彼女がいうように）小さいかもしれない。だがそれを彫った職人は、古今の人間の描き手のうちでも最大の一人だった」（中略）出版社になかなか理解されなかった理由として「それはあまりに繊細すぎた。今日でさえ、文学的素養が十分でない彼女の小説の並外れた長所を理解することはできない……」
表面的にはともかく、その内面の意味の理解は。。。』

と述べています。また、上記原本のジョーンズさんによる「イントロダクション」は、本書の歴史的意義と（著者が思いをたくした）ヒロインの魅力についてそれぞれ詳しく論じており、大変参考になりました。書き写したくなった文章は、たとえば

ロマンスは歴史を超えた繋がりをつくる
Romance makes connections across history

オースティンは読者が、単なる消費者ではなく、積極的な解釈者でもあることを基本的前提として小説の細部を書いている

Austen’s fictional technique depends crucially on the reader as an active interpreter, not just a passive consumer, of detail

エリザベスは「はつらつした精神の持ち主」という非常に異なるタイプの女性を体現している——『高慢と偏見』の格別な魅力は、彼女のアーティキュレットで独立した精神をもつヒロインにもよっている。

Elizabeth embodies a very different kind of femininity, “the liveliness of mind”. — The particular appeal of “Pride and Prejudice” is also due to

its articulate and independent minded heroine

これに対して和訳本いくつかの解説では、オースティンはそこまで高く評価されてはおらず、その理由は原文と和訳のギャップと関係しているような気がします。

(該当箇所の他の翻訳例)

* わたくしが奥方さまと同じような率直さを持ち合わせているとは申しません。ご質問はいくらでもどうぞ、でもそれにお答えするつもりはございません

* 私は生憎と奥様ほど率直な性質を持ち合わせてはおりません。奥様がいろいろとお訊ねになるのは御自由ですが、私としてはお答えしたくないこともございます。

* わたしあいにくと、奥さまと同じ率直さをもちあわせておりませんので、あなたがおたずねになるのは御勝手ですけど、わたしとしては、お答えしたくないと思う質問もございませんのよ。

いずれも、「フリをしない」「選ばない」を抜いた訳になっています。

(雑感)

オースティンと私の出会いは彼女の2番目（出版は1番目）の作品 "Sense and sensibility" からで、こちらへの動機は、後で引用するウオーフの著書に「sentiment という言葉は英語とフランス語で意味合いが異なる」と書かれていたことと、旧友との性格の相違と関連して関心があったこと、そして以前映画でも見たことでした。

英語版を必要と感じたきっかけの一つは、やたらに「頭が良さそう、悪そう」といった人物評が出てくるので著者はそういうことに価値を置きすぎでは？ でも英語ではどういったのだろう？ と知りたくなったこと。実際、英語でみると、センスが良さそう、理解力がありそう、物分かりが良さそう等（とそれらの逆）で、意味合いはそれぞれかなり異なるのでした。ここでも「この種の日本語の未分化？」を感じてしまいました。

一回読み終わってから日をおいてもう一度最初を読み返してみると、ごく短い第1章に、すでに多くの萌芽が含まれていたとびっくりしました。そこはエリザベスの両親の、夫婦同士の会話で、世俗的なものから距離をおきそれを皮肉っぽく批判する彼女の性格は父親譲りだったとわかります。

「ねえねえ近くに若い貴族の男性が越してくるそうよ、娘たちと縁ができるように、あなた他の家族にまけないよう早めに挨拶に行つてよ」「。。」「なんで関心ないの？、聞きたくな

いの?」「いや、喋りたいのはあんただろ、こちとらは聞かされるのを拒否はしないよ」結局、妻に内緒で挨拶に行ったのですが。

また、「わたしの神経がすぐ参ってしまうこと知らないの、心配してくれないの?」「君の神経?知らないどころか古い古い友達だよ。何度も何度も紹介してくれてきたじゃないか」。

(女性解放の歴史との関係)

フランス革命後の1790～1810年頃の英国では、政治における革新と保守反動のせめぎ合いが個人生活にも思想的影響を及ぼしていました。女性解放を求める啓蒙運動も始まり、しかし徐々に保守に押し戻されつつあるといった状況。作者は当時の英国の小地主の娘として育ち、機知に富んだ率直な「ものいい」を楽しむ性格でしたが、そうした中で自立心に目覚め、その表現をこの小説のヒロイン「エリザベス」の言動にたくしました。

原書の Introduction で Jones は時代背景について丁寧に解説していますが、その中で、当時起こった女性解放運動と関連する部分から、主な文献とそれに関するジョーンズさんのコメントを抜粋してみます。

* 保守側の代表は政治家で思想家でもあったエドモント・バークによる「フランス革命の省察」(1790)

E. Burke “Reflections on the Revolution in France”

「性別による分担の習俗と家族を政治の課題の中心に置いている」

“This puts sexual mores and the family at the centre of the political agenda”

* 革新側の代表はメアリ・ウルストンクラフト「女性の権利の擁護」(1792)

M. Wollstonecraft “Vindication of the Rights of Woman”

「男は理性 reason、女は感情 sense というが、本来は関係ない。受けた訓練の差だけ。動物的欲求のままに続ける恋愛を改善するには、知性が、従って教育が必要だ。女性も文化にもっと積極的に参加できるであろう」

”Women might be active participants in culture”

最後の「女性も文化に」は、世紀が代わり保守傾向が再度強まった中でも、もはや無視できないものとして残された、と解説されています。

* そしてもう一人は、かなり保守的な女性劇作家で思想家のハンナ・モア 「現代の女性

教育制度への『制約?』(1799)

“Strictures on the Modern System of Female Education”

「それぞれの性の長所を活かす方向を探るべきであり、長所を捨てて溶け合ってしまうことを心配する。女性には特に、洗練性 refinement、 繊細さ delicacy、 まともな態度や作法 propriety が大切。女性の幸福は、抑制と従順性に依存する」

これらについてジョーンズは、All-too-familiar (陳腐) なマナーブック様、と評しています。

オースティンの「高慢と偏見」は、モアが唱える「女性の幸福への条件」に対する強い批判を小説の形で表現した、とジョーンズさんは解釈しています。それによると、幸福の追求はもともとの小説の核心にあり、関連したキーワード (とほぼ対応する和訳)

reason, feeling, passion, propriety, decorum, modesty,
delicacy, elegance, independence

理性、感受性、熱情、まっとうな振る舞い、上品な礼儀作法、控えめ、
繊細、エレガンス、独立性

が、ヒロインに限らず登場人物のときどきの会話や描写に頻繁に登場し、どういう組み合わせが結局幸福をもたらしたかがロマンスの形で表現されている、恋愛小説としての面白さ、さらに「玉の輿」的結末が多く読者を得て、その影響が女性解放の底流を作った、との解釈です。

B) B.L. ウォーフ 「原語 思考 現実」講談社学術文庫

Language, Thought, and Reality;

Selected Writings of Benjamin Lee Wharf (second edition) The MIT Press

4月号の書簡(関連箇所のコピーを最後に貼り付けます)で私がふれたサピア・ウォーフの仮説が書かれた唯一の書物です。なお、私がこの仮説を知ることになったきっかけは情報検索ではなく偶然で、東京大学の広報誌「淡青」44(2022年3月)を眺めていたら「映画この一本」として『メッセージ』(ヴィルヌーヴ監督、2017年)を推薦した素粒子物理学者の大栗博司氏—京大数理解析研究所で一時期同僚だった—の記事をたまたま見つけたことでした。

—劇中にも出てきますが、サピア・ウオーフの仮説というものがあります。思考はそれに使われる言語の影響を受けるといって、言語学の世界では異論もあるそうです。でも、外国語を学んで考え方が広がるように感じることは確かにありますよね。バンクス博士も異星人の言語を習得する過程で世界の見方が変わっていきます。言語を学ぶことで思考が影響を受け、異星人の考え方に近づく。非常に面白いモチーフです。—

この著書から一箇所だけ抜き書きするならば以下の部分でしょうか。

第4章 p134

このような言語と文化と行動の間の網の目のような関係は歴史的にはどのようにして生じてきたものであろうか。言語のパターンと文化の基準とではどちらが先にくるのであろうか。大体においては両者は絶えずお互いに影響しながら共に発達してきたのである。しかし、このような仲間関係があると言っても、言語の方は自由な融通性を制限し、より独裁的なやり方で発展の経路を固定化する要素である。これは言語というものが単なる基準の集合ではなくて、一つの体系をなしているからである。大きな体系の輪郭が本当に新しいものへと変わる過程はまことにゆっくりとしているが、他の多くの文化面での革新は比較的早く行われる。

下線部1の原文

But in this partnership the nature of the language is the factor that limits free plasticity and rigidifies channels of development in the more autocratic way.

下線部2の原文

Large systematic outlines can change to something really new only very slowly, while many other cultural innovations are made with comparative quickness.

最後に、本ファイルだけの読者の便宜のため、以下、ミシマ社対談の4月号の私の書簡の原稿から関連箇所を貼り付けます。

(B2) 以前の書簡でイタリア語の表現を借用した責任上、

「文化は言語体系に深く影響されている」

というサピア・ウオーフ仮説の提唱者ウオーフの著作『言語、思考、現実』、およびそれに対する反論を含むドイツ人の著書『言語が違えば世界も違って見えるわけ』をひもといってみました（とりあえず和訳です）。これらについては又いずれと思いますが、文化への影響をより深いレベルで真剣に考察しているのはウオーフ側のような気がします。この仮説はその後「エビデンス不足」のかどで攻撃され下火になっているようです。その反論には半分

は納得がいきますが、元々の仮説での「文化への影響」は「深層での影響」であり、直截的なエビデンスなど元来ありえない、だから沢山の小さなエビデンスから「主張のレベルに応じてその可能性の大小を評価」するしかないのは明らか、それなのに反論はせっかちと私は感じました。

なおウオーフについて特に注目したいのは、幾多の「未開人」の言葉が（幾多の点で）欧米語より分析力などに優れていることにも気づき指摘したことでしょう。彼はアメリカの大学（MIT）では化学を履修し、就職した火災保険会社で主に化学製品由来の火事の原因究明に加えて予防運動と（特記すべき事として）啓蒙活動にも積極的に携わり、その中で、たとえば「使用済み缶」ではなく「空き缶」と呼ばれ乱暴に放置されていた揮発性ガスを残す危険な缶が「その大雑把な呼ばれ方のために」多くの火災の原因になっていたこと等々に強い思いをいたし（以前に中米文化に魅せられて研究していたこととも結びついて）言語の「粗雑さと比較」の研究に乗り出したという経歴です。後に言語学の学会でも有名になり大学から引っ張りだこになってからも火災保険会社の仕事を仕事を中心として最後まで辞めなかったとのこと（前述の書物の中の「編者解説」より）。

なお上記の「空き缶」云々の話は、彼の研究の「動機」であって仮説の「要因」ではありません。これに触れたわけは、より大きな「原発事故」の場合と対比してみたいからです。言葉の曖昧さに気づかないことの弊害のうち、これは「起こりうる危険性の『過小評価』」でしょう。